

軽井沢

Area

築25年超の月日を重ねたもてなしと癒やしの場

浅間山を望む斜面地に、大屋根がふわりと一枚掛かったかのようなシンプルな建物が存在しています。

建築家の矢板久明さんと直子さんの別荘は28年の間、ご両親と過ごす避暑地の山荘として活用。そして近年では、

親しい友人を招いてパーティを開くなど、ライフスタイルの変化とともにさまざまな歴史を重ねてきました。

南軽井沢の家 □設計／矢板久明＋上野 武 □所在地／長野県北佐久郡
□家族構成／夫婦 □撮影／川辺明伸 □取材・文／植本絵美

浅間山を眺めながら夕暮れ時をテラスで過ごす夫妻。晴れた日には引き戸をフルオープンにして、テラスとリビングを一体にして使っている。

Owner's Life Style

避暑からワーケーションまで 臨機応変に活用

Q. 別荘を建てようと思ったきっかけは？
もともと両親の別荘があり、退職後の時間を軽井沢の地でゆっくり過ごしたいという両親のため、老朽化した建物を建て替えました。

Q. その敷地を選んだ理由は？
「空に離陸するような場所」と説明＆紹介を受け、パイロットだった父が気に入ったため。

Q. どれくらいの頻度で訪れますか？
11月から春まで閉めていますが、GW以降はたびたび訪れます。標高が高く、東京から1月遅れで春がやって来るので、桜やレンギョウなどの花が咲くGWの頃が特に気に入っています（直子さん）。

Q. 普段どのようにお使いですか？
日々の疲れを癒しに來たり、気心が知れた友人を招いてのパーティ。最近仕事もします。

Q. お気に入りの過ごし方は？
長いソファで寝転がりながら読書を（久明さん）。階段側のソファでトップライトから空を見ながら過ごします（直子さん）。

Q. そのエリア・街の魅力とは？
時間がゆっくりと流れ、一日訪れただけでも癒やされます。

Q. 特にこだわったポイントは？
自然と人がしっかりと対峙できるよう設えたテラスの軒下空間。正面に広がる景色を切り取り、縁側のような場所でもあります。

Q. ライフスタイルに変化はありましたか？
約20年間は避暑や療養でほぼ両親との滞在。近年は友人を招いたり、リモートワークも。



VILLA
FOR RELAXATION
AND ENTERTAINMENT

左上に見えるのが構造であり、光の反射板でもある壁梁。三角形の開口の先に見えるのが屋上に設けたテラス部分で、階段を上ると玄関がある。

壁梁に光を反射させることで、北向きの空間に光を導く

建築家・矢板久明さん、直子さん夫妻の別荘は、南軽井沢の小さな山の上にある。道路側のファサードはシンプルに壁が一枚。アプローチのブリッジを渡ると、壁によって隠されていた視界がぱっと開かれ、屋上のテラスへ。北向きに急傾斜する地形から、玄関は屋上のテラスにある。室内へは、斜面に架けられた大屋根の下に潜り込むように入っていく。

まりを創出した。同時にこは、大きな一枚屋根を支える構造体にもなっている。トップライトの光に導かれるように階下へ下りると、リビングの先にはワイドに切り取られた浅間山を望む雄大な景色が広がる。屋上テラスから見る開放的な眺めとは異なり、盆地の向こうに山々が稜線を描き、奥行きも感じられる。リビングを中心に東側にダイニングとキッチン、西側に主寝室とバスルームを割り振り、さらに階下にはゲストルームを用意し、土間に空間を展開していく。リビングの天井は最も高い場所です。5・4 mもあるが、不思議と包み込まれるような体感。断面は正方形を斜めに切った形で、平面の長方形は3対5の黄金比になっている。

「結果的にそうになっていたのですが、プロポーションの調和は人に安定感をもたらしてくれます」と久明さん。開放感と安心感が同居する空間に、訪れた友人も時間を忘れてしまっほ。竣工から28年経ても、ますます人を引きつけてやまない。

しかし老朽化のため1992年に建て替えることに。北向きの立地から、光をいかにして室内へと導くかがテーマとなった。そこで設計を手掛けた久明さんと上野さんが考えたのが、反射板としての役割を果たす壁梁。これを玄関とリビングの間に架け渡し、トップライトから入る光を反射させて階下に光だ

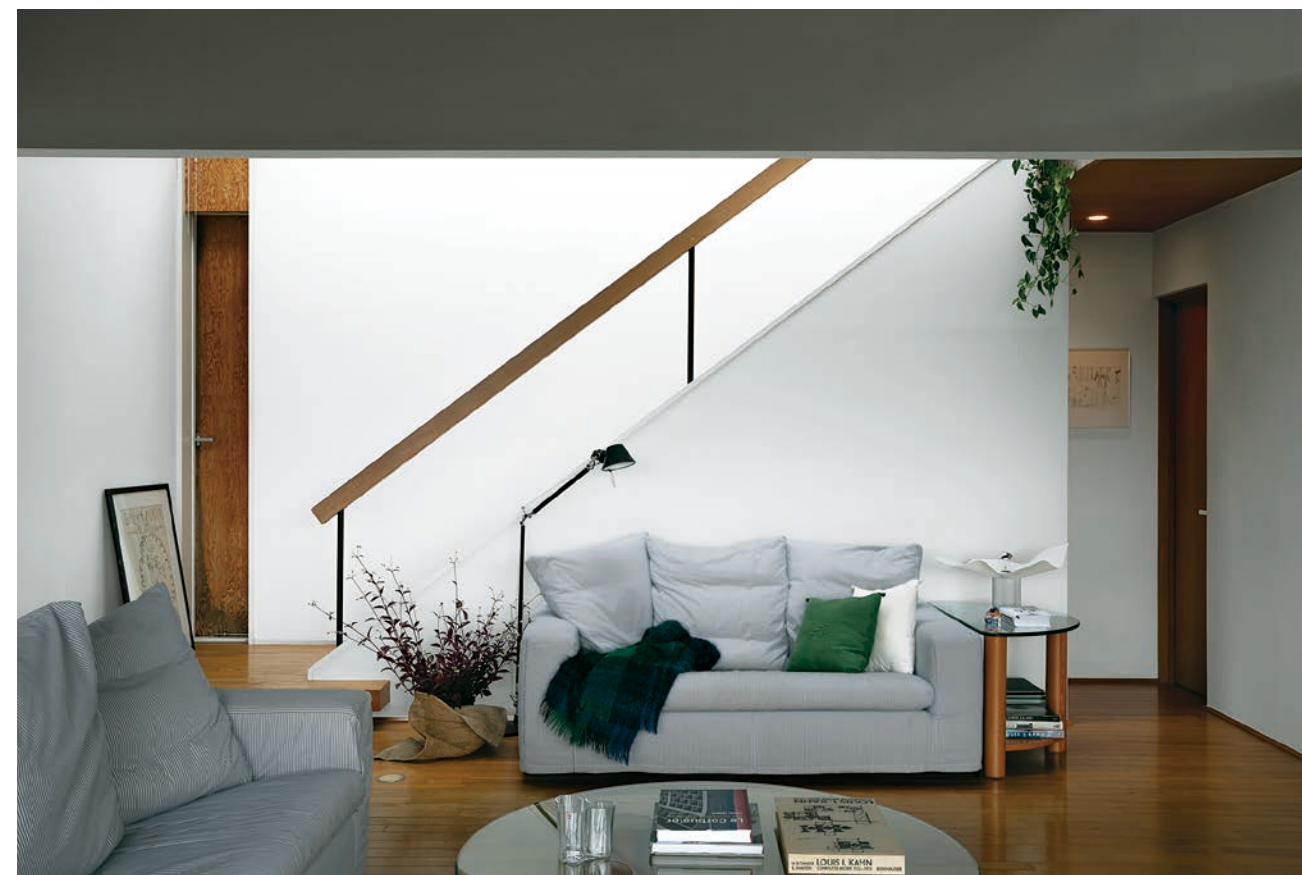
「結果的にそうになっていたのですが、プロポーションの調和は人に安定感をもたらしてくれます」と久明さん。開放感と安心感が同居する空間に、訪れた友人も時間を忘れてしまっほ。竣工から28年経ても、ますます人を引きつけてやまない。





あえて壁で景色を隠し、その先に広がる眺めをダイナミックに見せる

道路からブリッジを渡って屋上テラスへ。壁は入口を開けたのみ。ペイマツ材下見板張りの外壁は、木々の梢の色に合わせチャコールグレーに。



上 ソファは竣工時に購入したフレックスフォルムのもの。壁梁に光が反射し、リビングへ間接光となってこぼれ落ちる。手前のソファで寝転がって過ごすのが、久明さんのお気に入り。下 屋上のテラスからは、開口越しに階下のリビングダイニングの様子が見て取れる。





建築はこのくらいシンプルでいいんだと この別荘に来て学ばされました

——— 小堀哲夫さん

Profile 小堀哲夫

こぼり てつお／1971年岐阜県生まれ。1997年法政大学大学院工学研究科建設工学専攻修士課程修了後、久米設計に入社。2008年小堀哲夫建築設計事務所設立。2020年法政大学教授、梅光学院大学客員教授。2017年日本建築学会賞、JIA日本建築大賞を受賞。

ツチンが狭苦しくなっていた。しかし、「部屋とは心の宿る場所である（The Room is the Place of the Mind）」（※注1）というルイス・カーンの部屋の概念を思い出し、何かを見せようという余計な自我から解放されたのだという。

「心の宿る場所をつくることに専念したら、まるで最後のピースがはまるように長方形に十字の壁を配置しただけの、極めてシンプルなプランができ上がりました。デザインしたというより、彫刻家が石や木の中にある形を見いだすような、そんな感覚に似ているかもしれませんね。」

「恩恵の場所」とは 人が生かされる場所

「Availableは直訳すると『有用性』ですが、『働きかければ、返ってくる』という意味合いもあることから、『人が生かされる場所』『自分らしく

そして同じくルイス・カーンが残した『The Place of Availability』（※注2）という言葉。久明さんは以前、小堀さんが設計した建築の中で生き生きと働く人々を見て感動し、この言葉と共に、『恩恵の場所』というオリジナルの和訳をプレゼントした。



「もともと軽井沢は、屋根のない病院、ともいわれる癒やしの地。景色を見ながら、一日の太陽の動きとともに規則正しい生活を送り、自然を享受したら父が歩けるように。この場所の力を実感しました」と直子さん。北向きの家だからこそ、まぶしさを感ずることなく、太陽に照らされた美しい景色を眺められる。朝はダイニングの窓から朝日が入り、夕方は西側の窓から壁梁に木漏れ日によって陰影が描かれる。光は反射によって柔らかな表情となり、光の移ろいは見えていて飽きることがない。

時を経て愛され続ける 別荘の魅力とは？

一緒に海外へ建築を見に行くほど、互いの設計思想に共感しているという矢板久明さん、直子さんと、同じく建築家の小堀哲夫さん。某日、夫妻に招かれて別荘への再訪を果たした小堀さんとともに、別荘における“The Place of Availability（恩恵の場所）”をテーマに語り合いました。

この別荘は自分にとって 体の延長のようなもの

久明さんがこの別荘を設計したのは36歳のとき。それまではオフィスビルやホテルなど大規模な建築が多く、住宅設計はこれが初めてだった。当時、設計をしながら久明さんは不思議な体験をしたと振り返る。

「『ここに窓を開けよう』と考えると自分の頬に風が当たったような感覚がして、『ここには朝日が入るな』と考えたら自分の体がぼっと温かくなる。この建物がまるで自分の延長のように思えたのです。」

その体感がそのまま空間として立ち上がった「南軽井沢の家」。設計の楽しさを改めて実感し、久明さんにとって転機となったプロジェクトだった。竣工から約20年の間は、夏季に1カ月半ほど両親を伴って避暑に訪れ、次第にケアの比重が多くなると、軽井沢で過ごす時間も長くなり、ここから仕事に通うこともあった。長期の入院で歩けなくなったお父さまを連れてきたときのこと。3週間ほどここで過ごしたところ、歩けるようになり、主治医も驚いたという。

「もともと軽井沢は、屋根のない病院、ともいわれる癒やしの地。景色を見ながら、一日の太陽の動きとともに規則正しい生活を送り、自然を享受したら父が歩けるように。この場所の力を実感しました」と直子さん。北向きの家だからこそ、まぶしさを感ずることなく、太陽に照らされた美しい景色を眺められる。朝はダイニングの窓から朝日が入り、夕方は西側の窓から壁梁に木漏れ日によって陰影が描かれる。光は反射によって柔らかな表情となり、光の移ろいは見えていて飽きることがない。

心が宿る場所をつくることに専念したら この建物が生まれました

——— 矢板久明さん



両親が亡くなってからは別荘の利用も変化し、ここ数年は友人を呼ぶ機会が増えた。友人の小堀さんはこれまで3回訪れ、家族を連れて泊まったこともあったそう。この別荘の魅力について、小堀さんはまず地形に着目する。

「後ろに山があり、前方は開放的ですが、盆地状になっている。これは配置計画の妙だと思いますが、最初に来たとき、自分を中心にして大いなるものに包まれているような感じがしました。後ろは壁で閉じられていて、後ろからそつとガウンを掛け

られていたような温かな感覚です」。明快でシンプルな空間構成についても、小堀さんは驚きを見せる。

「一言で言うなら、この別荘は、屋根一枚の建築、なんです。ここを訪れて感じたのは、久明さんがこの場所をこよなく愛しているという純粹な気持ち。だから、場所の良さを純粹にトランスして、驚かせようとか、表現しようという気持ちが皆無なんです。建築はこのくらいシンプルでいいんだ、と学ばされました」。実は当初、久明さんは階段の突き当たりの壁に窓を開け、景色を見せようと考えていたため、その結果キ



建築とは人を生かすもの。 そんな建築の力に気づかされました

——— 矢板直子さん

Profile 矢板久明・直子

やいた ひさあき／1982年東京大学大学院建築学専攻修士課程修了。1982年谷口建築設計研究所に入社。1994年矢板久明建築設計研究所設立。やいた なおこ／1982年日本女子大学家政学部住居学科卒業。1982年アーキブレン建築研究所に入社。2002年内田直子建築研究所設立。2005年より矢板建築設計研究所を夫妻で共同主宰。2014年JIA新人賞、2016年The Architecture Master Prize GOLD PRIZE（米国）を受賞。

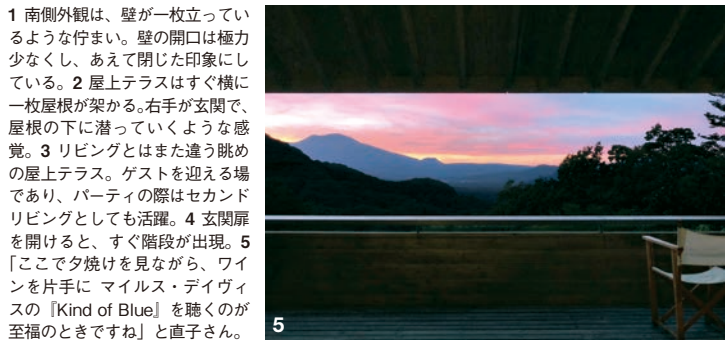
「『ここに窓を開けよう』と考えると自分の頬に風が当たったような感覚がして、『ここには朝日が入るな』と考えたら自分の体がぼっと温かくなる。この建物がまるで自分の延長のように思えたのです。」

「『ここに窓を開けよう』と考えると自分の頬に風が当たったような感覚がして、『ここには朝日が入るな』と考えたら自分の体がぼっと温かくなる。この建物がまるで自分の延長のように思えたのです。」



「『ここに窓を開けよう』と考えると自分の頬に風が当たったような感覚がして、『ここには朝日が入るな』と考えたら自分の体がぼっと温かくなる。この建物がまるで自分の延長のように思えたのです。」

「『ここに窓を開けよう』と考えると自分の頬に風が当たったような感覚がして、『ここには朝日が入るな』と考えたら自分の体がぼっと温かくなる。この建物がまるで自分の延長のように思えたのです。」



写真提供／矢板建築設計研究所

※注1 出典／“The Room is a the Place of the Mind”
“The Room, the Street, and Human Agreement, 1971 speech by Louis Kahn
※注2 出典／“Availabilities”
“Architecture, The John William Lawrence Memorial lectures 1972 by Louis Kahn
“Lectures at Independence Hall 19 May 1971 by Louis Kahn



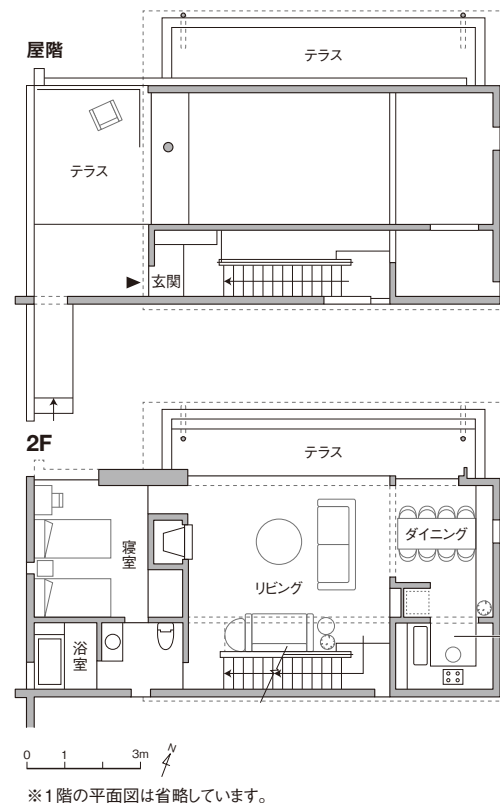
DATA

南軽井沢の家

- 設計 / 矢板 久明 上野 武
- 敷地面積 / 661.81㎡
- 延床面積 / 122.52㎡
 - 1階 / 50.09㎡
 - 2階 / 68.89㎡
 - 屋階 / 3.54㎡
- 家族構成 / 夫婦
- 所在地 / 長野県北佐久郡
- 用途地域 / 第一種住居専用地域
- 構造 / 木造 鉄筋コンクリート造(基礎)
- 構造設計 / 松本 年史
- 工事期間 / 1991年11月～1992年7月
- 施工 / 丸山工務店
- キッチン製作 / 造作

MATERIALS

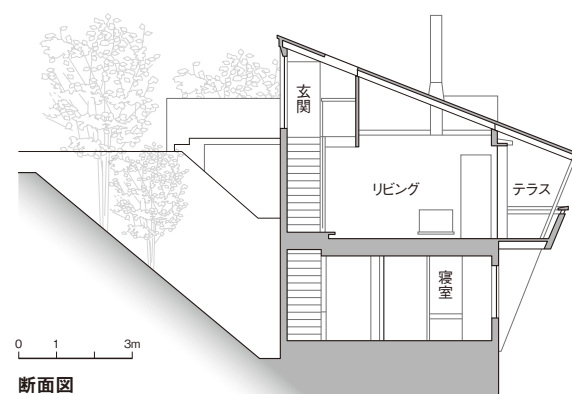
- 外部仕上げ
 - 屋根 / フッ素樹脂塗装銅板
 - 外壁 / ベイマツ南京下見張り ステンブルーフ
- 内部仕上げ
 - LDK
 - 床 / ベイマツフローリング
 - ウレタンクリア塗装
 - 壁 / PB+AEP
 - 天井 / ベイマツ 野地板表し(垂木)



※1階の平面図は省略しています。



6 十字に架けられた梁がひとつながりの空間を緩やかに仕切っている。長方形のプランは3:5の黄金比だが、意図したものではなく、何度もスタディした結果生まれたもの。7 リビングの西側に隣接する主寝室。ピクチャーウィンドウの横には開閉できる小窓を設けた。8 深い軒がテラスを雨から守ってくれる。引き戸を開け放つことでリビングと一体になったくつろぎの場にもなっている。9 トップライトからの光が回り込み、明るいキッチン。コの字形のプランはキッチンとダイニングが一体の空間になる一方、リビングからは見えなくなる設え。10 リビングの一角に設置した暖炉。夜は居場所を照らす控えめな照明で落ち着いた雰囲気に。



断面図



白くプレーンな壁に木漏れ日が光の斑を描く

水平方向に広がりがあるリビングに対して、玄関から続く階段部分は垂直方向を強調した空間になっている。トップライトと南側に唯一大きく取られた開口から光が差し込む。